

のは、聞いた風の音を云ふものだよ。

作平「さやうで御座りまするで御座りまする。」

襟三は作平を相手に例の自分一流の通を振廻しつゝ、酒店の方を眺めて居ると、多数の整粧を凝らした美人は紳士を捉へ、蟻が砂糖に集まるかのやうに酒店に集つて、最と美味さうに各自酒を叩つて嬉々何やらん樂し氣に語つて居るのが眼に映じた。

襟三のう爺、アレを見い西洋の劇場は交際の花といふのだが、彼のやうに紳士貴婦人が集合して居るところは確にそれを證據立て居るぢやないか。

作平「さやうで御座りまするか。」

襟三「即今は暮間だから私も二三の紳士貴婦人と名刺の交換をして来やう、作平、お前もお出で。」

襟三は椅子を離れて酒店に近づいたが、紳士らしいものは襟三を見

もしないで、美人と噂々と話合つて居る。

作平、作平、英國人は米國人のやうに最初から親しまないで居つたが、事實その通りだよ、私がこゝへ来て居るのに紳士は私に交際を結はうとしないね。

作平「さやうで御座りまするやうで御座りまするな。」

襟三は紳士が自分に交際を結はうとしないので、少々不満の體で附近をキヨロくと眺めて居ると、夜會服を立派に著た一人の男子が襟三に近づいて来て。

夜會、日本の紳士、何かこの椅子におかけ下さいまし。

と云つて襟三と作平に椅子を進めて何所ともなく去つた。

襟三、作平、彼の人物は何者だらう？私に椅子をすゝめて置いて何所へか行つて仕舞つたが、夜會の禮服を纏ふて居る點を見ると、一個の紳士らしい思はれるが、のう作平、英國人でも先見の明

のあるものは、私に交際を結はうといふので即今のやうに椅子の周施までもして呉れるのだ。

作平「さやうで御座りませうかな。」

三「御座りませうかなではない、事實がそれを証明して居るではないか。」

三は以前の不満は何所へやら失せて、頗る得意の體で椅子に腰を下して傲然と稱へた。そこへ二三人の美婦人が来て。

美人「日本の紳士……」

と優しい聲をかけた、三は「サア貴婦人が交際を求めに来た」と喜色を満面に湛へつゝ、ポケットより名刺を出し美人にそれを渡し

三「私は名刺にある如く高井三三であります、而して彼所に居りまするは私の従僕であります、私は貴女と自今交際を願ひますとを名譽と思ひます。」

と三は頗る氣取つて云つた、三の半熟の英語の意味は美婦人に充分通じたか通じないか判然ないが、美婦人等は三の言葉を聞いて。

美人「そんな御丁寧な挨拶は要らないとよ。」

美婦人はいと親しげに三に話しかゝる、三は心中大喜悦で。

三「貴婦人何か此方へ——」

と椅子を勧めた、美人は遠慮なく椅子に腰を下す。作平は美人の馴々しき動作を見て聊か心配を催し。

作平「ア一例のものでなければ可いが。」

と獨語た。

美人「チャカイさん貴方は何を飲みなさいます？」

三「私——私ですか？私は葡萄酒を好みます。」

美人「オヤ！葡萄酒をお好きにさいますの？では私と同一とよ。私嬬

しいわ、

美人の口を借つて葡萄酒は注文せられた、襟三は貴婦人が要應するものと倍々嬉しく飲んで、美人の馳走を受けたまゝで捨て置いては「日本紳士の名譽に關する」と、襟三は負けぬ氣を出して三鞭酒を注文した。美人は襟三が注文した三鞭酒を遠慮なく飲んだ。その内に幕は巻つて舞臺は二幕目となつた。

美人何も御馳走さま。

美三有難う。

三人の美人は襟三に謝辭を云つてブイと自分の椅子へ歸つて仕舞つた。襟三は美人に去られたので玉手箱を火くした浦島といふ體で、不承々々自分の椅子へ歸らうとした。酒店のものはそれと見て、

給仕紳士、御勘定を――

と襟三に請求した、襟三は心得たといつたやうな風で。



しいわ

美人の口を借つて葡萄酒は注文せられた、襟三は貴婦人が響應するものと信じ嬉しく飲んで、美人の馳走を受けたまふで捨て置いては「日本紳士の名譽に關する」と、襟三は負けぬ氣を出して三鞭酒を注文した。美人は襟三が注文した三鞭酒を遠慮なく飲んだ。その内に幕は擧つて舞臺は二幕目となつた。

美人、何も御馳走さま。

美二有難う。

三人の美人は襟三に謝辭を云つてブイと自分の椅子へ歸つて仕舞つた。襟三は美人に去られたので玉手箱を失くした浦島といふ體で、不承々々自分の椅子へ歸らうとした。酒店のものはそれと見て、

給仕紳士、御勘定を――

と襟三に請求した、襟三は心得たといつたやうな風で。



劇中、酒け

三三 諸々、幾何だ？

給仕 葡萄酒が二志林づゝで御座いますから都合一磅で、三鞭酒が瓶で三十志林合計二磅十志林で御座います。

三三 葡萄酒が一磅！、葡萄酒は彼の貴婦人が馳走をして下されたのだらう。

給仕 紳士、御戯談お仰しやつてアハ、、、彼の貴婦人とお仰しやいまするは、遊君で御座いますもの、如何して紳士に御馳走を致しませう、アハ、、、御戯談を……

と云はれて襟三はアット一驚を吃した。襟三が貴婦人だと思つて名刺を興へて、交際を結んだものは帝國座の一名物たる高等内侍であつたのだ。

三三 道理で何だか馴々しいと思つた。

と後悔したが今更如何にもなるものでないから、襟三はプツ／＼云

ひながら二磅十志林の金額を拂つて作平に向ひ、

三爺、私は倫敦が否になつた、殊にこの劇場は否な所だと思ふから旅館へ歸らう。

作平、それがお可しう御座りまする。

そこで三は作平を連れ旅館へ歸つた。三は昨夜の失敗に聊か閉口したと見へ、翌日は外出をしないで夕刻旅館の仕拂を濟せ、作平と俱に倫敦を出立した。

(二十七) 奇妙な日本語

ドオヴァー行きの列車は倫敦停車場から徐々と進行し、秒々分々速力を早めた。その列車の一等室に傲然と三は腰を下して作平を敵手に談話をして居る。

三、作平、今日まで宿泊して居つたシ、ル旅館は世界で有数の大旅館だけあつて、設備の整頓して居る點なり高尚な點は實に感心なものだ。

作平、さやうで御座りまする、米國の旅館は立派は立派で御座りましたが、旦那さまのお仰しやれまする通り、シ、ルのやうに高尚では御座りませんで御座りまする。

三、お前もそんなに思ふて居るかい？

作平、思ふて居るかい——とは旦那さま、この爺ぢやとて貴方さまのお従僕で御座りまするもの、それ位とは思はないで居りませうか。

三、成程々々、さういへばさうだの、お前がそんな考を抱くやうになつたも、私が自然に指導してやつたからだ。

作平、さやうで御座りまする、私が斯うやつて無事に日を暮せまする

は親旦那さまなり、貴方さまが人にして下されましたので御座りまする。

三三 亡父がかい？

作平 親旦那さまが……

三三 亡父がお前を指導したかね？

作平 人にして下されましたので御座りまする。

三三 人にして呉れた！、これ爺、私が云つたのは人にしたではない、

指導したといふとだよ。

作平 人にては御座りませんか、逆待したとお仰しやいまするので御

座りまするか。

三三 さうだよ。

作平 は驚いたといふやうに眼をグロリとさせつゝ、

作平 旦那さま、貴方さまは何故そんなとお仰せ遊ばしまする、如

何致しまして勿體い至極もない、親旦那さま——お亡くなり遊ばしました旦那さまが、私を逆待なされませう。

三三 亡父はお前を指導しなかつたといふのかい？

作平 へい、如何致しまして。

三三 では私が指導したといふのかい？

作平 イエ如何致しまして貴方さまが——

三三 ちや何人がお前を指導した？

作平 何人も私を逆待したものは御座りませんで御座りまする。

三三 何人にも指導されないといふ？

作平 は不思議さうに作平の面を眺める。作平は面を眺められたので

ウザくして、

作平 ハイ、何人にも——

三三 ちやお前は自然と成長たのであつて、何人にも指導されたとは

ないといふのだね？

作平「ハイ、さやうで御座りまする、私は何人でも私を逆待致し
たなれば、それだけの返報は致しまする、男子の復讐三倍と
申しまするもの。」

作平の言葉に襟三は愈々合點が行かぬ面色で、

襟三「これ爺、お前は何を先刻から云つて居るのだ？」

作平「私はお聞き遊ばしまする通り、他人が私を逆待目に會したとが

御座りませんと申して居りまするので御座りまする。」

襟三「私が何時お前に逆待目に會つたと尋ねたかい？」

作平「貴方さまが「私がお前を逆待した」とお仰しやいました。」

と云はれて襟三は作平が、指導を逆待と誤解したるを知り。

襟三「アハ、ハ、ハ、爺、私が云つたは指導で逆待ではないよ、指導と
云ふことは導き教へるといふとだよ。」

作平「さやうで御座りまするか、それは鈍んだ間違ひで御座りました
な。」

イヤモー私のやうに年齢を重ねますると、昔時のとしか存じま
せんもので御座りまするから、旦那さまのやうに英語をお仰し
やつて下されましますると、ツイ誤解ましてなりません、何卒これ
からは英語でなく日本語でお話し下されませ。

襟三「英語！、指導が英語とは驚いたな。爺、指導といふ言葉は決し
て英語ではない、立派な日本語だよ。」

作平「指導は日本語で御座りまするか、モシ旦那さま、そんな奇妙な
日本語が出来ましたので御座りまするか、世界が開けてまゐり
ますると、漸次と妙な無つかしい言葉が出来ましまするな、アハ、
、。

作平は大聲で笑つた、乗客は作平の大聲に驚いて作平と襟三の面を

眺めた。襟三は乗客が自分と作平の面をジロく眺めるのを見て、
 襟三「お前が米國の列車の内、で笑つたやうに、例の大聲を出して
 笑つたので面を眺めて居るから注意しなければ否ない。
 作平「へい、然し旦那さま、西洋といふところは笑ふとも出来ま
 せぬとは、不自由な土地で御座りまするな。
 やがて列車はドオツア一に著いた。乗客は先を争ふて波止場へ出て
 汽船に乗つた、襟三作平も乗り遅れてはならないと急いで波止場に
 行き汽船に乗込んでホット一氣息ついた。間もなく汽船は解纜して
 波止場を離れた。襟三作平は甲板に直立して、
 襟三「作平、これで英國を離れるのだが、一ヶ月でも住んで居つた土
 地を離れると思ふと、何となふ心のこりがするやうだな。
 作平「さやうで御座りまする。
 襟三「事實だ。」

作平「ところで旦那さま、英國を離れまして何所へまゐりまするので
 御座りまするか？
 襟三「これから佛國へ行くのだよ、佛國には世界の遊び場所といはれ
 て居る巴里があつて、巴里は倫敦以上の都だよ。
 作平「へー！巴里は倫敦より立派なので御座りまするか。
 襟三「勿論だ、世界中何所へ行つたつて巴里ほど立派なところはない
 よ。
 作平「そのやうに上等な土地で御座りまするか。
 襟三「上等！上等とは驚いた形容詞だな、マアお前のお云ひの通り上
 等として置いて、如何にも上等だ。
 作平「それで地獄に据へてある鏡が不思議によく映る鏡で御座ります
 るで、上巴里と申しますので御座りませうアハ、ハ、ハ。
 二人は甲板に居つて海面を眺めて居つたが、そよ吹く潮風に寒さを

覺へて、船室へ入り寝臺へ横臥になつた。然し襟三は何となく眠りに就きかねた。翌朝眼を覺すと汽船は港内へ入つたと見へ、乗客は下船の用意をして居る。

襟三「作平、汽船が波止場へ着くから上陸するに間がないよ。作平「へー、佛蘭西とかへモ一着いたので御座りまするか？」

襟三「さうだ佛國のクレーへ着いたのだ。」

程なく汽船は波止場へ着いた、船内の給仕は銅鑼を敲いて乗客に注意を促した。

襟三は作平を連れて波止場へ上陸かゝつた、汽船の事務長は襟三に向ひ、

長事務「乗船券を下さい。」

襟三「イエス、それ乗船券を二葉渡しますぞ、その一葉はこの従僕の

です。

と襟三は乗船券を二葉渡した、事務長はその乗船券を見て、

長事務「これは本船の乗船券では御座いません、倫敦から巴里へ行く乗船券で御座います。」

襟三「さうです、勿論さうです、ですからお渡したのです。」

長事務「それでは貴方は汽船をお間違ひになりました。」

襟三「汽船を間違へたとは？」

長事務「この汽船は佛國行きの汽船ではありません、ドオグアールとアントワープ間を往復する汽船です。」

襟三「それではこの港は？」

長事務「白耳義のアントワープで御座います。」

襟三「エーッ！アントワープ！オヤ／＼／＼襟三は驚いてロアングリ。

(二十八) 入らつちやい

三は「茲所はアントワープです」と云はれたので、脚下に爆烈弾が爆発したほどに吃驚したが、今更如何することも出来ない度胸を据へ、事務長へ貨金を拂つて作平と俱に波止場を出て、トある旅館に荷物を下した。

三作平、私はツイ狼狽なものだから汽船を間違へて、こんなところへ到着したのだが、白耳義は商工業の隆盛な土地だから視察をしても可いのだ。

作平間違で御座りましたか。

三さうだよ。

作平ところで旦那さま、佛蘭西のバリと白耳義の茲所とは何里ほど

方角が違つて居りまするので御座りますか？

三百哩位は違つて居るだらう。

作平百哩！、旦那さま、間違といふものは怖ろしいもので御座りまするな、鐵砲の銃丸も筒口で僅か一分違つても五十間も前面へまゐりますると三尺も四尺も間違つて仕舞ますると同一とで、貴方さまが百哩も方角をお間違へ遊ばしましたも、出發地へ行きますれば、一寸汽船をお間違へ遊ばしましただけで御座りまする。

三さうだな。

作平東郷大將と申しまして大山大將さまと申しましても、源流に溯りますれば私と同一とで、二柱の御神さまから出たので御座りまする。

三マ、そんなものだな。

作平「で御座りますれば旦那さまも私も同一とで御座りまする。
三「如何にもその通り。」

作平「で御座りますれば、今日からは旦那さまも私も同一で御座りま
するから、何か可愛がつて下されたう御座りまする。」

作平「これは恐縮だな、アハ、ハ、ハ、」

三「は笑つたが、何を思つたか一寸首を捻つて、

三「作平、旅館に居つても仕方がないから散歩に出かけやうではな
いか。」

作平「それがお可ろしう御座りませう。」

三「は例の氣取つた服装をして作平と俱に旅館を出た。」

この白耳義は歐洲の中立地であるが言語は佛蘭西語で土語とを併用
して居つて、中流以上なり旅館なり商人は佛蘭西語を用ひて居るが、
中流以下は白耳義の土語を用ひて居る。

三「は佛蘭西語を少しも知らないのみならず、勿論土語をも知らな
いのだが、萬一途中で間諜附くやうなことがあつては大變だといふ
ので、旅館の前面に輝いて居る電氣燈を目標にしてブラリブラリと、
作平を連れて歩き出した。」

作平「旦那さま、この港は巨大な汽船が入港しますが、その比較に大
洋が見へませぬな？」

三「さうだ、このアントワープの港は大洋に面して居る土地でなく、
私等が乗つた汽船は大洋から河を溯つて來たのだ、さういつた
風の港は西洋には幾何もあるのだ、手近い個所では倫敦だ、倫
敦は一萬噸位の汽船がドシ〜と入港つて來るが、それは皆な
テムス河を上つて來るのだ。」

作平「さやうで御座りまするか、へー。」

二人は何か談話しながら歩いて居ると、波止場附近に來た。

作平「旦那さま、こゝは如何やら見たやうな個所で御座りまするな。
作平の言葉に襟三は注意して見ると、前刻上陸した波止場であつた。
襟三「ヤヤ〜！前刻の波止場だ、こんな個所をブラツイたつて仕方
がないから、この邊から横町へ曲らうぢやないか。
二人はトある横町へ曲つてドシ〜と歩くと、酒店だの怪し氣な家
屋がある。

作平「旦那さま、奇妙な個所へまゐりましたやうで御座りまする。

襟三「さうらしいね。」

作平「君子は危険に近寄らずで御座りますれば、早く何所へかお供致
しませう。」

襟三「それが可い。」

二人は一步も早くその個所を去らうと歩を早めて居ると、トある怪
し氣な家屋から二三人の美人が奔けるかのやうに出て、襟三作平に

近附きて聲優しく、

美人「貴方……入らつしちやい。」

と日本語で云つた。

作平「貴方……入らつちやい！とは、旦那さま吃驚致しまするな。私

等はお前さんに用事がないのだから御免下さい。」

作平は早くも美人を醜業婦と認めためたので、襟三の手を曳き逃げるや
うに美人を突き放つて、一二町も奔け出してホット一氣息つき、

作平「旦那さま、危険なとで御座りましたな、魔蹊々々して居つたら、

また終夜直立て居らなければならぬやうになるところで御座
りました。」

襟三「何にそんなとがあるものか。」

作平「それでも私は布哇と英吉利西……」

襟三「そんなとは云はんでも可しい。」

鼻持のならぬ襟三でも主人は主人だ、作平は襟三の言葉を鶴の一聲
ほどに感じ、

作平「へい、く、然し旦那さま私は彼の美婦が、貴方……入らつちや
いと申しましたのには吃驚致しまして御座りまする。

襟三「さうだらう、私も驚いたよ、だが爺、彼奴等は如何して日本語
を習つたのだらう？」

襟三の疑問に作平は首を捻つて、

作平「さやうで御座りまする、私が熟考まするには彼のやうなもので
も、天理王さまの有難さを聞いて居りまして、是非天理王さま
を信心致したいといふので、日本語を稽古致しましたので御座
りませう。

襟三「何に、そんな馬鹿なところがあるものか。

作平「否へ馬鹿などでは決して御座りませぬ、西洋人でも心あるもの

は天理王さまを信仰致しまするで御座りまする、それ故近々英
吉利西へ神官が四五人お渡航遊ばしまするさうで御座りまする。
と作平は頗る眞面目に云つて拍手を打ち、

作平「南無天理王の尊……」

襟三「作平、道路でそんな真似をするものでないよ、馬鹿々々しい。

作平「へーい。

作平は残念さうに祈禱を止め、

作平「旦那さま、前刻のやうに怪しい魔性ものが居りまするやうでは、
この土地も怖しい個所で御座りませうで、一刻も早う巴里とか
へまゐらうでは御座りませぬか。

襟三「さうだな、それが可からう、では直ぐ旅館へ歸つて、ブラッセ
ルを経て巴里へ行くことにしよう。

作平「それがお可ろしう御座りまする。

二人は旅館へ歸つて出立の用意をしてブラッセルに向つた。

* * * * *

ブラッセルは白耳義の首府で倫敦だの伯林だの巴里だの、大都會と
比較は出来ないが、山椒小粒でもヒリ、と辛いで、小さいながらも
立派な都會で交通機關なり市内の設備は整頓したものだ。

襟三作平はブラッセルに著いて、グランド旅館へ荷物を下した。

襟三作平、こゝは白耳義の首府ブラッセルだ。

作平、へー、こゝは巴里では御座りませぬか？

襟三「さうだ巴里ぢやない。

作平「では矢張同じ白耳義の國內で御座りまするか？

襟三「さうだ。

作平「旦那さま、それでは私はこの土地を好みませんで御座りますれ

ば、早う巴里へまゐりたう御座りまする。

襟三「お前は何故そんなに巴里が好きだ？

作平「巴里が好きといふ譯では御座りませぬが、この白耳義は怪し氣

な魔性のものが居りまするから、作平の腹の蟲がトント好みま

せぬで御座りまする。

襟三「腹の蟲！さうかい、ぢや直ぐ市中を見物して巴里へ出立しよう。

作平「それがお可しう御座りまする。

二人は旅館を出て散歩旁々市内見物に出かけた、勿論案内者を備入

れて。

襟三「作平は旅館の案内者に誘われて王城圖書館曰く何と、諸所を見物
して本町通といつたやうな町へ出た、その町の繁華さ人馬織るが如
しなぞといふやうな形容詞で盡し得るとでない。

作平「旦那さま、何といふ繁華な町で御座りませう、東京の土地の土

一升金一升と申しますれば、こゝは土一升金剛石一升と申した
位で御座りまするな。

三士一升到金剛石一升とは奇抜な形容詞だよ、文明の風に吹かれ
ると爺も進歩するものだな。

作平「さやうで御座りまする風と申しまするものは、豪氣なもので御
座りまして、ナカ〜人間のの上を行くもので御座りまする、第一
その證據はビユ〜と吹いて居ります風は空を吹いて居りま
する。

三「さうだねえ、事實風は大したものだ、藝妓に警察風などは確に
怖しいものだアハハハハ。

作平「さやうで御座りまする、風でも潮風などは柔いものでアマリ吹
かれて居りますると、顔面が褐色になります、それは私が申し
まするまでもなう、昔時から潮風に吹かれてお顔が眞黒色、此

方かまやせぬ〜と叫にも申して居りまする。

案内者は二人の談話が何事を意味しつゝあるか了解しないが、二人
が聲高に笑ふを聞いて、

案内「何か面白いものがお眼に止まりましたか。

三「別段面白いものが眼に映じたのではない、故國の話を話して居
つて笑つたのだ。

案内「さやうで御座いますか、面白いといへば茲所から少し行らつし
やいますと、ブラツセルの名所である面白いものがお眼に入
りますよ。

三「ブラツセルの名所で面白いもの！、はて何だらう？」

三は首を傾けて熟考たが何とも要領を得なかつた。作平は襟三が
熟考に沈んで居るのを見て何か心痛でも起つたのかと思つた。

作平「旦那さま、如何なされましたので御座りまする？、何所がお悪

い。のでは御座りませぬか、御腹痛なれば陀羅尼助も熊膽も携帯して居りまする、それとも他の御病氣なれば天理王さまへお願ひ申しませう。

三何所も悪くはないよ。後世だから天理王は爾後云はないでお呉れ。

作平「ハイ」

と云つたが作平は何だか不平らしい面色で、ブラリと案内者の後から歩いて居つたが、何を見たか鈍狂な聲を出して、

作平「ヤア」面白くものがあるぞ

三は作平の聲に驚いて作平を眺める、作平は三の面を見て、

作平「旦那さま、前面を御覧遊ばしませ奇妙なものが見へて居ります。

作平は指さして三に注意をする、三は作平の指示す方を眺め、

三奇妙なものとは何だ？

作平「旦那さま、彼を御覧遊ばせ人形が放尿を致して居りまする。

三「何に！人形が放尿して居ると？何れ」

三は陣を定めて見ると小兒が直立して放尿して居る像があつた。

三「成程、放尿をして居るね、全體彼は何だらう？」

案内者は前刻申上げました、ブラッセルの名所で御座います。

三「ハ、——放尿して居るのが名所とは、面白い名所もあつたもの

だな」

案内者「面白いでせう、その面白いところに名所の價値が御座いますの

です。

と云つて案内者は眞面目に構へ、

案内者「抑も彼の放尿人形の起源は……昔時々々その昔時、ブラッセルに

大金満家がありました、夫婦の間に一人の男子を生みましたが、

その男子の可愛らしさといつたら大變なもので、夫婦は我子の

愛には明日から乞食者になつても可いと思ひました。
襟三は案内者の説明を聞いて、

襟三 成程、それから――

案内者 夫婦は花と我子を可愛がつて暮して居りますと、その男子は年々歳々年齢を重ねまして十幾歳になりましたが、或日のと如何したのかその男子の姿が見へなくなりまして。

襟三 それは大變だつたな、夫婦は定めし泣き悲んだらう。

案内者 勿論です、泣き悲んだが行術は少しも判然ませんでした。

襟三 それから如何したい？

案内者 判然しないものですから夫婦は我子の姿を銅像に刻んで、衆人の眼につくやう放尿し居る態に致しました、而してその男子を無事連れて来て呉れたものへ、大金の謝金をすると申しました、彼の銅像は即ちその時の銅像であります。

襟三 それでその男子は首尾好く夫婦の手へ歸つたかね？

案内者 終に歸らずに仕舞ました。

襟三 では彼の銅像は何の効力もなかつたのだな？

案内者 さうです。

襟三 それはその道理だらう、放尿だからお流れになつたのだアハ、

と襟三は日本語で駄洒落た。

(二十九) 怖ろしい怪物

首府ではあるが國が小さい白耳義だもの大して擴くはない、襟三作平は三日ほどにブラッセルの名所舊蹟の見物を了へた、で愈々明日白耳義を出立して佛國へ行かうといふ前日に、襟三は旅館の番頭に

道順の相談をした、日本出立當時の襟三であつたなれば、ナカク旅館の番頭風情に旅行に就て、相談などをかけるやうなことはないのだが、今日まで嘗め來つた苦味々々失敗は、一語片言をも解しない佛蘭西語の本場へ陸の旅行をするを、流石に心細く感せしめた。番頭は襟三に相談をかけたので「では斯うくなさつては如何です」と云つて親切に教示たがその道順は、襟三はカレーから巴里までの乗車券を買つて居るのだから、白耳義からカレーへ汽車で行き有名なアミーンのコナック建築だの、聖、美世爾だの、鱈の漁場だのを見物して巴里へ著くといふのだ。

襟三成程、それは頗る好旅行だ、ではさうするから乗車券を注文して置て下さい。

番頭「ハイ承諾致しました。

襟三は「これで出立するに心配はない」と云ふので、作平を連れて

夕刻から旅館をブラリと出て、何所といふ目的もなしに歩いた。

襟三のう爺、明日出立するとなると、三日しか居らないブラツセルでも、何だか心残りがするやうじやないか。

作平「さやうで御座りまする、昔時私が上方へまゐりましたとき、東海道（東海道）の驛々で泊りましたとが御座りまするが、一夜泊りでも翌朝出立する際は、何となう出立ともない氣が致しましたとが御座りまするが、私は西洋へまゐつてから出立するのを何とも思はなくになりました。

襟三「フーン、それは不思議だな。

二人は雑話ながらブラリくと歩く。

作平「然し旦那さま、モ一彼是十二時になりまするが、貴方さまは何所までお歩行なされますお目的で御座りまする。

と云はれて襟三ははじめて心附き、

三三「サア失敗た。」

と叫んだ。作平は襟三の叫聲に驚いて、

作平「旦那さま、如何かなされまして御座りまするか？」

襟三は目的もなくブラリ〜と歩いたのだから、何時となく方角を失なつたのである。

三三「作平、ツイ雑談に我身を忘れて何所だか、方角も知れないところへ出て仕舞つた。」

作平「それは飛んだことになりましたして御座りまするな、それでは間諜附て居りますると布哇であつたやうな事になりは致しますまいか、貴方——旦那さま、今夜は何か御病氣にだけおなり下されませぬやうに願ひまする。」

三三「病氣などにはならないから安心して居るが可い。」

と云はれても作平はナカ〜安心が出来ない、心配で〜天理王を

内々祈つて居つた。

三三「爺、斯うなつては仕方がない、私はこの土地の人間に會つたところ、佛蘭西語も白耳義の土語も出来ないのだから、何所かへ着くか私等の脚が棒になるか、歩けるだけ歩くとしよう。」

作平「それより致方が御座りませぬ、ヤレ〜心細いことになつてまゐりまして御座りまするな。」

二人は心細さに次第に雑談が少なくなり、夜は次第に更けて闇黒々々空に冷やかな風が吹いて居る。

三三「ア、冷として来た。」

作平「さやうで御座りまする。」

二人は街燈の燈光を力に歩行て居ると突然間から「ウー」といふ怖ろしい吠聲が聞へた、と思ふと間もなく眼光鋭い四肢動物が飛出して来て、二人に向ひ牙を鳴し今にも噛附かんとした。襟三はそれに驚

いてツーンと一爆放つて卒倒した。作平は襟三が氣絶をしたのを見て動物の怖しさをも忘れて、襟三を抱き起し、

作平「旦那さま、旦那さまのうー」

と呼んだ。スルト間から二人の男子がスツト出て作平に近付き、何か言葉をかけた。然し作平は何をいふのか了解なかつた。二人の男子は襟三が氣絶して居るのを見て驚き、何か二人談合つて一人は何所ともなく姿を消した。作平はそれに眼も觸れないで、

作平「旦那さま、作平で御座りまする、爺で御座りまする、何卒回生て下されー」

と叫んで、豆粒のやうな涙を襟三の面に滴しつゝ介抱をしたが、襟三は生氣に回復ない。側に居る一人の男子はその光景を見て、言葉は不通ではあるがイト親切に襟三を介抱した。作平はそれに力を得てその男子に向ひ日本語にて、



襟三の絶

いてウーインと一聲放つて卒倒した。作平は襟三が氣絶をしたのを見て動物の怖しさをも忘れて、襟三を抱き起し、

「作平旦那さま、旦那さまのうー」

と呼んだ。スルト間から二人の男子がユツト出て作平に近附き、何か言葉をかけた。然し作平は何をいふのか了解なかつた。二人の男子は襟三が氣絶して居るのを見て驚き、何か二人談合つて一人は何

所ともなく姿を消した。作平はそれに眼も觸れないで、

「作平旦那さま、作平で御座りまする、爺で御座りまする、何卒回生

て下さる——モスコレオウへ入れてちよ、うららら——」

と叫んで、豆粒のやうな涙を襟三の面に滴しつゝ介抱をしたが、襟

三は生氣に回復ない。側に居る一人の男子はその光景を見て、言葉

は不通ではあるがイト親切に襟三を介抱した。作平はそれに力を

てその男子に向ひ日本語にて、



襟三の死

作平「早う水を持つて来て下され、氣絶には何よりも水が第一で御座る。」

と云つたが馬耳東風、相手に少しも通じない、作平は焦燥で、

作平「水ちや、水ちや早う水を……」

と大聲に連呼だが、男子には通じないのみならず、寧ろ男子を狂狼せしめ、その男子は何と思つたか作平の手を捕へた。

作平「エーッ！こなんとななるなれば、假へ夷狄の言葉でも習つて置くであつたに――」

作平は獨單焦燥て居ると、車輪の響音が聞へて、程なく先刻立去つた、男子と醫師らしいものと使丁らしいものとが同乗した馬車が作平の近側へ着いた、スルト醫師らしいものは先づ馬車から下りて、襟三に應急の手當をした。その効は忽ち顯著れて、襟三は「諾」と一聲發して生氣に回復た、作平はそれを見て跳らんばかりに喜悅で、

作平「旦那さま、お氣が附きましたか？」
襟三は作平の聲が耳に入つたか、微に眼を開いて力なき聲で、

襟三「オ、…………ち…………爺かい。」

作平「ハイ爺で御座りまする。」

三人のものは襟三が昏々として居るが何やら生氣に回復たのを見て、襟三を抱き作平を殿しく捕へて俱に馬車に乗せ何所ともなく去つた。

* * * * *

こゝはブラッセルの日本公使館の一室だ。室の一隅にある寢臺には襟三が横臥て居る、その側の椅子に腰を下して居るは公使館の書記生である。

書記「如何です少し御氣分が好くなりましたか？」

襟三「ハイ——有難う御座います。」

書記「何に御謝辭に及びませう、然し貴方は全體何故氣絶をなさつたのです？」

襟三「私——ですか、私が氣絶したのは真闇な所から怖しい怪物が私に向つてまゐつたので、ツイ氣絶を致しましたのです、遊獵に出かけたときでもあれば怪物が出る位のは豫期しないでもないですが、文明な歐洲の首府を散歩して居つて怪物に出會すなどといふとは豫期して居らないのですから、ツイ一時氣絶致しましたのです。」

書記「怪物とは何な動物ですな？」

と問はれて襟三は先刻の恐怖を想起したものにや、ブルくくと身を震はしつゝ、

襟三「何な形態な怪物ですか、それまで確と認知るとは出来ませんが、何にしる燃焼た怖ろしい眼光で私をグット睨んで、ウ

「と強い聲を出したものですから、私はそのまま氣絶したのです、その怖しさと云つたら想出してゾットするです。」

書記「はてな、私は今日までブラッセルにそんな怪物が現出たといふとは聞いたとがありませんが、何も不思議ですな。」

書記生「は怪邪に堪へないといつたやうに首を捻つた、然し何とも要領を得ることが出来なかつた。」

書記「それは不思議ですな。」

書記「それでは貴方はその怪物を見て、氣絶をなさつたのみですか？」

書記「さうです。」

書記「はてな、それでは愈々了解なくなつた。勿論事實の如何は存じませんが、警官のいふ所では、貴方が或日本人のために加害されて氣絶せられたのを助けて、常館へ取敢ず送り届け、その加

害者を拘引したといふのですが。」

書記「ヘーン、不思議で御座いますね。」

書記「全く不思議だ、了解に苦むね。」

書記「では私の従僕の作平といふ老爺をお呼び下さい、さうすれば爺は私に随行して居つたのですから、詳細とが了解せう。」

書記「貴方の御従僕ですと？」

書記「ハイ、私と同行して居りました。」

書記「さう承知で見ると警官が、貴方の加害者だらうと云つて拘引した日本人といふのは、貴方の御従僕でないか知らん？」

書記「ヘーン、その加害者と目せられたものは幾何位の年齢のもので御座いました。」

書記「何でも六十に近い老爺さんといふことでした。」

書記「は書記の言葉を聞いて、湯中に冷水をあびせられたほどに驚き、

三三「それではその加害者といふのは私の従僕作平で、決して私に加害したものではありません、ですから何か作平をお受取下さい、彼は親父の代から拙宅に居りまする律義な老爺で御座います。」
三三「それでは飛んだ間途ですね。」
三三「間途もく、飛んだ大間途で、筑波山と立山ほど相違して居ります。」

三三「では警察署へ行つて、作平爺とやらを貰つてあげませう。」

三三「恐縮ですが何か願ひます。」

三三「承諾しました。」

と云つて三三は襟三を遣して置いて退去た。それから三十分間ばかり過ぎて、三三は作平を連れて歸つた。襟三は作平と三三を見つて嬉し氣に、

三三「何も恐縮で御座います、何も有難う御座います、高井襟三は職

んで感謝致します。作平、有難うお謝辭を申せ。

三三「有難う御座りまするで御座りまする。」

三三「何に、これ位のことにお謝辭に及びませう。」

三三「お陰さまで爺が無事歸つてまゐりましたので安心致しましたが、安心出来ないのは彼の怪物ですよ、彼なものが當市中に生存して居りましては、今後とても私のやうに氣絶するものがあるでせうから、警察署へそのことを注意してやりたいものです。」

三三「私は貴方が怪物云々とお仰せになつたものですが、警察署で一應そんなものが生存して居る噂を聞かれたとがあるか如何だかと、尋ねて見ました。」

三三「成程、流石に貴方は外交官だけあつて、御注意周到ですな。」

三三「ところで警察署では何と申しました？」
三三「尋ねますと警察署では、そんな噂は夢にも聞いたことはない……」

三「はてな。」

書記「と云つて、それは恐らく當地の警官が連れて居る犬が見馴れない日本人を見て「ッ」と吠へたのを、日本の紳士が恐怖心のため、怪物だと思はれたのではないだらうかといふことでした。」

三「エーッ！警官の犬！」

當地の警官は犬を連れて居りますか？

書記「夜分になりますと、警官は必らず犬を連れて居ります、といふのは人間よりも犬の方が、耳目が敏活でありますから、當地の警察署では犬を養成して採用して居るのです。」

三「成程、さう承はると怪物と思つたは或は犬であつたかも知れませんが、それでは事に仍ると私は犬に吠へられて氣絶したのでせうか？」

書記「何うやら、さうらしいやうですな。」

三「とは愈々恐縮ですな。」

(三十) 都會と人間と同じこと

三「作平は翌日ブラッセルを出立した、車中の二人は物をいふ立派な座者であるが、雙者と書いた木札を頭から胸にかけてたものと同じやうに、二人が携帶して居る乗車券は二人を雙、磨へ送つて、其所から、雙、美世爾を見物せしめた。」

三「作平、彼を見なさい、彼は雙、美世爾と云つて佛蘭西の名所だ。作平「へー、見せるといふ名所で御座りますか？成程、名所であるから何人にも見せるで御座りまするな。」

と云つて作平は雙、美世爾を眺めて感心する、作平が物珍らし氣に眺めるのも道理だ。こゝは彼の有名なユーゴーが「佛國に於る埃及

のピラミッドだ」と叫んだ個所だもの。
其所を去つて二人は漁場を見物した。

佛國の漁場は我國のそれの如く、白砂青松と云つたやうな風情はな
いが、網の修葺をしながらうたふ漁師の俗語は、矢張自然に近い叫
びの聲だ。

二人は馬車の御者に導かれて漁村を歩行て居ると、沖の方から波を
切つて漁船が勇ましく歸つて来た。

作平「旦那さま、彼の勇ましい掛聲では澤山な漁が御座りましたので
御座りませう。

三三「さうだらうかな。

作平「さうで御座りまするとも。

と云つて作平は波打際に進み、漁夫が陸揚をする魚類を覗き、

作平「何たるとちや、これは―彼なに勇ましい聲であつたから鯛や鰹

が多数捕れたのちやらうと思つたに、小さな鯛しかないとは何

たるとちやらう、こんな鯛は日本で肥料にもチト不向ちやて。

三三「爺、お前は鯛を見てそんなにお云ひだが、西洋では鯛は頗る高

價なもので魚類中の王としてある、その證據は何日だつたけ銀

座の明治屋へお前が鯨詰の鯛を取りに行つたのがあつたらう。

作平「へい、御座りました。

三三「その時にお前は眼をムイテ吃驚したとがあつたらう。

作平「さやう、小さな鯨詰を登壇参拾錢ちやと申しましたので。

三三「何だ、西洋ではそれ位鯛が高位のだ。

作平「へい、さう承知ますると如何にも、さやうで御座りまする

な。

三三「さうだらう。

作平「さうして見ますると西洋人といふ野奴は、何所までも毛唐人で

毛色の變つた代物で御座りまするな、鯛のやうなものを食はな
いでも鯛だの鯉だのといふ立派な魚類が御座りまするのに、ヤ
レ〜因果な野奴で御座りまするわい。

襟三作平は車中よりアーミンのゴチック建築を眺め「ヤレ〜」奇態
な建築ぢや」と作平は例の鈍問聲を出して、同乗の客を驚かしたが、
先づ〜大した失敗もなく無事巴里へ着いた。

巴里の停車場へ着けば、一語の佛蘭西語を話せなくつても、旅館の
ものは一人でも多く泊客を生捕ふといふのだから、大旅館には英語
なりその他の國語を解し得るものを備ふてあつて、そのものが停車
場へ出張して来て旅客を親切に取扱つて呉れる、勿論自己の金儲の
ために！

襟三は巴里の旅館へ着くと直ぐ、馬車に乗つて日本大使館へ出かけ
て巴里の事情を尋ねた。大使館員は襟三のやうな邦人に襲はれた經
験に當んで居るから、如才なく襟三作平を待遇し。

館員成程、御視察ですか！それは結構なとです、出来得るとなれば
館員の何人か、當地を御案内申上げて可いのですが、近頃或
外交上のとで非常に多忙を極めて居りますから、遺憾ではあり
ますが失禮致します、さる代りに邦人の佐野といふ至極親切な
人物が御座いますから、その人に案内をして呉れるやう、當館
から依頼を致しませう。

襟三それは何も恐縮ですな。

襟三は大使館員の盡力で佐野某といふ邦人に案内をして貰ふとに決

定たので、ヤレ／＼と安心してその日は旅館に歸り、翌朝から巴里の
見物にかゝつた。

佐野といふものは以前茶業のため、巴里へ來つたのであるが、巴里
の居心持が可いのか、それとも他に何か事情があつたものか、日本
へ歸らうとしないで、既に十数年巴里に住居して居る人物であるから、
頗る附の巴里通で館員なども彼から巴里の事情に就いて教を聞くと
が度々ある。さういつたやうな人物であるから襟三が巴里を見物し
ようといふには、願ふでもない好都合なのである。

翌朝旅館から三名の日本人を乗せて馬車はラフェル塔に向つた。そ
の三名の邦人は云ふまでもなく佐野某と高井主従だ。馬車は巴里の
町々を縫ふてラフェル塔に著いた。

ラフェル塔は巴里大博覽會のとき建築した高塔で、その頂上へ昇つ
て四方を見下すと、巴里の市街は勿論田舎さへも目に入る。

佐野これがラフェルの高塔です、私は所明「案内者」なるものであ
りませんか、勿體振つた説明は致しません、詳細などは案内記
を御覽なさい。

襟三成程、實地に就いて見ると、豫想より高い塔ですな。

爺、これが有名なラフェル塔だ。

作平「高いもので御座りまするな、淺草にあつた人造富士だの十二階
を高いと思ひましたが、これから見ますると竹と研草ほどの相
違で御座りまするな、そこでこの塔の名稱がアリフレヌ塔で御
座りまするな。」

襟三「アリフレヌではないラフェルだ。」

佐野に導かれて襟三作平は塔上に昇ると、巴里市街は隅々までも眼
に入る。

佐野「それ彼所に流水が見へませう、」

と指示す。

三三「ハア。

佐野「彼がセイヌ河です。

三三「成程。

兼「彼が有名なセイヌ河だ。

作平「へいへいへい。

と云つて作平はセイヌ河を見下し、

作平「ヤア、彼の河に橋が架設してあるが、一寸見たところでは東京の隅田川と同じやうで御座りまするな。所變れば品變る浪速の葦も伊勢の濃狭ぢやが、何國でも大きな都會は同じとて、市街に河が流れて居りまするもので御座りまする。東京では隅田川、大阪では淀川、京都では加茂川、ニューヨークでは慾が深くて兩側に何とやらいふ河が御座りまする、倫敦には何とかいふ

河、巴里にも彼の千住河……

三三「千住でない、セイヌ河だ。

作平「へい、そのセイヌ河が御座りまするが、河を斯うして眺めますると、都會の帯のやうに見へまするぢや。見へまするばかりでは御座りませぬ、全く帯で御座りまするぢや。さうして見ますると都會も人間も同じとて御座りまするな。

佐野は作平にはじめて接したのだから、作平のことを詳しく知らないので、不思議さうに作平を眺めて、

佐野「都會と人間と同一だとは？」

作平「同じで御座りまするでは御座りませぬか、人間が帯や帯を締めませぬと何となふ、締がないのと同じやうに、都會に川が流れて居りませぬと締が御座りませぬでは御座りませぬか。
佐野「成程、奇抜な御迷論だな。」

三、然しそれは日本服のことで、洋服には帯がないではないか。
作平「おつと、それはお間違で御座ります。以前は存じませぬが、
近頃は西洋人でも帯がないと、身體に締まらないといふことが了解
たと見へ、電氣帯などを致しませぬか。
佐野「成程、身體に締まらないため電氣帯を締めるとは愈々出で愈々
奇抜だ。」

三、彼は病氣のために締めるのだよ。

作平「さ、その病氣といふのが締まらない故に、起るので御座ります
で御座ります。」

佐野「身體に締まりがありますれば病氣には決してなりません、その證據
には何事にも締まりが大切ぢやと申して、弗論やら西洋錠を用ひま
すやうになり、便所にさへ固く締まりつけねばならぬと見へ、石
灰を散くでは御座りませぬか。」

三、便所を締るために石灰を撒布するとは益々奇抜だ、アハ、ハ、ハ。

(三十一) 名折れ翁だ

三人を乗せた馬車は飛んでベルサイユに着いた。

作平「旦那さま、即今までは鬱茂た樹木だの茫々な池があつて、ナカ
く好い景色で御座りましたが、こゝは大した建築で御座りま
するな。」

と云つて、作平は一寸首を捻り、

作平「こんなに大きな建築物は？旦那さま、作平はこの建築物が何だ
といふとはチャント承知して居ります。」

三「お前がかい。」

作平「ハイ、私か？御座ります、私ちやと申して、これだけ洋行し

てまゐりましたので御座りまするもの、習ふより馴れで自然と了解てまゐりまする。

襟三 フーン。

襟三 は作平の言葉に感心し、

襟三 爺、妙なものだな、お前などには進化とか文明とかいふ風潮は、

兎ても吹きさうにないと思つて居たが、不思議なものだな。

ところで、爺、彼の建築は何だね？

作平 彼は寺院で御座りまする。

襟三 寺院？

と襟三は呆れて叫んだ、然し作平はそれに氣もつかず、

作平 寺院で御座りますると、私は思ひまするで御座りまする、今日

まで洋行致しました、英吉利西でも愛爾蘭土とやらでも、白耳

幾とやらでも、大きな建築物は大底寺院で御座りました、ハイ

高いく塔が立つて居りまする寺院で御座りました。で御座りまするで、彼の建築物は必と寺院で御座りまする。

襟三 それは飛んだ誤解だ、彼はベルサイユの宮で、彼の宮は歴史と深い關係があるのだ、佛蘭西の革命は彼所から起つたと云つても可い位なのだ。

作平 へー。

作平は了解ないなりに感心をした。

佐野は二人を導いて、ベルサイユ宮殿を見物せしめ、トある莊嚴な

墳墓を指示し、

佐野 これはナポレオンの墓です。

と云はれて襟三作平は墳墓を眺め、

襟三 これがナポレオンの墳墓ですか、如何にも立派ですな、彼の如き大英雄にはこれ位の墳墓を作つても可いですな。

佐野「さやう。」

作平は襟三の云つたところが了解ない、で例の調子で襟三に向ひ、

作平「旦那さま、ナオレンとか何とやらいふものは何で御座りまする。」

襟三「ナオレオンではない、ナポレオンだ、彼は日本で云へば豊臣秀

吉のやうなもので、彼は卑しい靴屋の忤から起つて、歐羅巴各

國を攻めて威を振つた英雄だ。

作平「へー、それでは大閣さんになりましたので御座りまするな？」

襟三「さうだ、豊臣秀吉位のものではない。」

作平「それでは大した方で御座いまするな。」

作平は何かなしに感心をする。

襟三「さうだ、彼は欧州各國を捲土して、露國を攻めにかゝつた。」

作平「露助を攻めにかゝつたとはナカク、寒い方で御座りまするな。」

襟三「ところが地理の不利のため、ナポレオンはサンクト・ペテロブルグと苦闘

した後、大敗をして露國から逃げ出した、それから以降は不幸に不幸を重ね、千古の英雄と云つても可なりであるナポレオンも、セントヘレナといふ島へ流竄されて、更け行く夜半の月を眺めつゝ可憐な最後をしたのだ。大英雄のナポレオンもセントヘレナに居るときは、一個の漁夫よりも卑或點は劣つて居つたらうよ。

作平「ではナポレオンといふ方は、三世相で初め吉くて、末凶しで御座りまするな。」

佐野ははじめて作平の話を聞いたのだから、この話を聞いて、聊ならず呆れ作平の面を眺めた。襟三は平常から馴れて居るとだから平氣なもので、

襟三「さうだ、云へば所謂三世相だな。」

作平「三世相で御座りまするとも、而して後に漁師よりも劣つたやう

では、ナポレオンではなく、ナオレオウ(各折れ翁)で御座ります
るで御座りまするわい、ワハ、ハ、ハ、ハ、

佐野 作平翁さんは見かけに依らない奇抜なことを云びますね。

随分今日まで巴里へ来て、ナポレオンの墓を見た日本人は少
くないが、大底は大ナポレオンだとか、千古の英雄であるとか、
英雄の末路憐むべしだとかと云つて、この墓で烟に捲かれて仕
舞うものばかりです、英雄ナポレオンを名折れ翁と罵倒した
は、作平翁さん一人だ。これに仍つて想像すると、維新前の攘
夷家の勇士は作平翁さん式のものだつたのだと思はれますね。
三三 そんなものでせう、蘇老泉の所謂文字を知るは憂を知るの本で、
事理を解さないものほど、強く且つ危険なものはありますまい
よ。アハ、ハ、ハ、

佐野 これから何所を案内致しませう、如何です貴方は今から、巴里

名所の一である下水道を御見物なさいますか？

三三 下水道？

三三 は一聲高く叫んだ。それは巴里の下水道の事を知らないから
不思議に思つたからであつた。

佐野 ハイ、下水道です。

三三 ハア、彼の下水道ですか、それは兼て耳にして居つたのですか
ら、是非視察をしたいと思つて居つたところですから、御案内
を願ひませう。

と三三は例の聞いた風を粧ふ。

* * * * *

我國の下水道しか知らない人には、巴里の下水道が大規模であると
を説明しても、恐らく信じてないだらうが、實際巴里の下水道は他國

に比類のないもので、下水道に船を浮べて内部を見物する底の大規模のものだ。
襟三作平は佐野に案内されて、下水道の内部を見物する。
襟三何もこれは驚いたものですね、斯のやうな大下水道は世界に唯一です。

佐野さうです、ですから巴里名所の一になつて居るのです。何といつても先進國は先進だけあつて、何所かに特長があります、急進したと西洋人はお世辭に褒めますが、東京だつて大阪だつて漸く二十年ほど前に下水道が布設された位で、下水道なんかはお話にならないほど、不完全なものでせうよ。

襟三さうです、全くお話にならないほど不完全なもので、首府に泥溝があつてドン／＼微菌を養成して居るのです。

とですもの。

作平「水道が出来て間がない——とは何所かで御座りますか？」

佐野「日本がさ。」

作平「日本がちやとーモシ佐野さん、貴方は日本に水道が出来て間がないと、お仰しやいまするが、西洋では何日頃水道が出来ましたのです。」

佐野「僕は詳しいとは知らないが、西洋では三十年も四十年も以前に水道を布設したものだ。」

作平「三十年も四十年も以前で御座りますると、たつた三十年や四十年前に出来たので御座りまするか、五十年にも足りない位の以前に、西洋では漸々エンヤラサと布設したので御座りますか、それなれば幾何日本の方が早く水道を出かしたかも知れません。襟三「なぞと、爺はまた怪氣烟を吐き出すかね。」

佐野、何しろ、英雄を名折れ翁と罵倒するお爺さんだから、奇想天外から落つといつたやうな、素敵な珍説を吐くかも知れなだらういから、高井さん、お爺さんの怪氣相を拜聴したいものですよ。作平さん、お前さんの日本の水道談を承はりたいね。

と云はれて。作平は浮調子になり、
作平「お話し申ませう。西洋の水道が四五十年前に、はじめて出来されたもので御座りますれば、水道を發明した本家本元は日本で御座りまして、西洋の野奴はそれを模倣たので御座りまする。三三と云ふと、日本には西洋より早く水道を布設したのだね。

作平「さやうで御座りまするとも……」
佐野では何年頃から日本には水道があつたのだね？
作平「それは三代將軍家光公の時分から、御座りまして御座りまする。佐野、へーん。そして水道は何所へ布設せられたのだ。

作平「それは江戸にて御座りまする。
佐野「オイ、爺さん、そんな間拔たを云つては否ないよ、彼んなものは水道ではないよ。」

作平「水道でないとは！貴方は怪しからぬとお仰せられまするな、江戸では昔時から「御本丸の太鼓をドンと聞いて、水道の水で産湯を使用したお兄いさんだ」と申しまするわい、それを水道でないとは、何事で御座りまする。」

佐野「だつて彼んなものが、
作平「彼んなものとは何事で御座りまする。
作平と佐野は自然と聲高になつた、三三はそれと見て、
三三「佐野君、彼んな爺を相手になさつては、餘り大人氣ないではありませんか、そんな些細なとはこの水道に流して、何所か花やかな側所へ御案内下さいな。」

と云はれて、佐野は我身の大人氣なかりしに心附き。苦笑をなし、佐野如何にも、御注意の如くです、では花やかな個所へ案内致しませう。

(三十二) 君主のお能拜見

巴里は歐洲の美術の中心になつて居る、さればサロンの立派など、音楽唱歌の聲の絶へないと、演劇の盛んなとは歐洲第一位である、その演劇界に二大劇場があつて、一をグランド、オペラと呼び、一を佛蘭西座と呼ぶ。前者は観覧者を紫雲に乗せたかのやうに恍惚たらしめる、傑作のオペラ劇を演じ、後者は世界の有名な傑作物を、新古を論せずドシくと上場する。だから佛蘭西座へ行けば、佛のコーネユ、ラシン、モリエール、メラルリンク、ロスタン、サル

ドウ、伊のカーデロン、タ、アンノンチオ、獨のゲエテ、ズーデルマン、レスシング、ハイゼー、英の沙翁劇、ピネロ、シヨウ、北歐のイブセン、ストリングブルグと、種々の脚本を日々晝夜演じて居る、されば一年間に約二百七八十種も異つた脚本を場の上さうである、だから歐米の劇界では、この佛蘭西座を「劇界の寶庫」と呼んで居る。

襟三が花やかな個所へ案内して呉れと、佐野に云つたので、その日の夕刻から馬車は三名を乗せて、グランド、オペラ座へ着いた。佐野さア、グランド、オペラへ着きました。

佐平「これが禮服を着ければ観覧とが出来ませぬ、劇場で御座りまするか。

如何さま建築は、莊麗で御座りますが、それでも高が演劇で御座りまするに、禮服を着なければならぬとは、厄介な劇場で御

座りまするな、こんな奇妙なとを致しまするところは、矢張り色人は紅色人で御座りまするな。

佐野「それは、この佛蘭西の風俗習慣を御承知なさらないから、奇妙だと思ひなさるのだ、だがね、郷に入れば郷に従へと昔時から云つてあるのだから、マア〜仕方がないと断念さ。

三「作平、お前は観劇に禮服を着けるのを不満に思ふだろうが、そんなとは日本にだつてあるよ。

作平「日本にそんなものが日本に御座りまするかな。

三「あつたよ、然しそれは現今ではない、お前の好きな昔時にあつたのだ。

作平「はてな、昔時のとなれば、失禮では御座りますが、貴方さまよりこの爺の方が好く存じて居りまするから、そんなものが御座りましたとなれば存じて居りまする筈で御座りまするに、はて

不思議なとで御座りまするな。と作平は切りに首を捻る。

三「了解ないかい、爺。

作平「日本に？ 了解ませぬで御座りまする。

三「了解なければ教へてあげるがね。

作平「へい〜。

三「その代りに今後は、昔時のとは何でも了解て居ると、高慢な鼻を高くするとは出来ないよ。

作平「へい〜。

三「では教へてあげるがね、昔時日本で禮服を着て、演劇を見たのは、君侯のお能拜見だ。

作平「お能拜見！ 成程、お能拜見！ これは作平ゾント威心致しまして御座りまする。

襟三作平はオペラを見物して、何かなしに烟に捲かれたかのやうに感心をした、それもその筈その時のオペラは下々のコーラス(合唱)唄女まで撰びに撰んだ大一座であつたのだもの。

作平「何といふ美くしい演劇で御座りませう、成程、これ位に美しくい演劇で御座りますると、禮服をつけてまゐりませんければ、演劇を汚がすやうになりませうで御座りませう、こんな事があると豫知して居りましたなれば、私は日本から上下を携帯してまいりました、日本の禮服の四角四面なところを、見せてやりますので御座りましたに、上下さへあればこんな鶴鶴のやうな洋服をつけませんでも可しう御座りまするに。

百の理屈よりも一の實行が優るもので、作平兼も滌蕪な場内へ入つては自然に同化されて、上下が欲しいと云つた、然し昔時の上下が果して調和が保ち得るであらうか？

やがて演劇が了つたので三人は劇場を出た。

佐野「如何です、巴里の大劇場は立派なものぢやありませんか。」

三三「全く莊麗なもので、感服の外ありません。これでこそ劇場が都會の粧飾と云はれるのですね。」

佐野「眞實です。」

作平「劇場は立派で御座りますが、飲食物を少しも食ませんやうで御座りまするが、當地で觀劇と申しますると、我家を出て歸つてくるまで、食はず飲まずの行をするので御座りまするか？

佐野「そんなとはありません、劇場へ行けば歸路に、必らず料理店へ入つて夜食をするとなつて居ります、御覽なさい私等の隣席に居つた観客は、それ彼所の料理店へ入りませう。」

三三「入りますね、では私等も入らうぢやありませんか。佐野では御案内致しませう。」

佐野は先に立つてトある料理店へ入り、三人は食卓につき。料理を注文して、佐野は手軽く食事の手を運ぶ、襟三は例の如く氣取て食物の美味さの幾分を失ひ、作平は何かなしにムチャムチャ。由來佛國では何所の旅館なり料理店へ行つても、葡萄酒は要ない。特に云はなかつたなれば、食事に葡萄酒は必らず附随したもので、我國の食事に煎茶が添へてあると同じやうなものだ。襟三は食卓の葡萄酒にヤ、微酔になつて來た。

襟三、佐野さん、私が衆て聞いて居るのに、巴里には世界各國に類のない、珍妙なものがあるさうですが、私はそれを視察したいと思ふのです、探検をして見たいと思ふのですが、御案内下さるでせうか？

佐野、類のない奇妙なもの？

襟三、伊藤公なんかもナカク盛んに探検せられたといふとですが…



伊藤の娘

……

佐野彼れですかい、それなら直ぐです。
作平は二人の談話に「はてな」と首を捻つたが、その夜作平、再び、トある怪し氣な家屋の前に立番をして、道路を洗ふ水道の水に洋服を濡した。

(三十三) 日本から電報!

翌朝、襟三と佐野は眠むさうな眼をして戶外へ出て来た、作平はそれと見るなり、

作平「旦那さま。

と叫んで襟三の手を促り、

作平「旦那さま、こんな巴里のやうなところに、滞在なさつてはなり

ません、今日即今から巴里を出立致しませう。

佐野は作平が襟三を促へ「即今から巴里を出立しよう」と云つて居るのを見て、何の事だか少しも要領を得なかつた。

佐野何にもそんなに蜂が刺いたやうな、直ぐ出立せんでも可いではないか。

作平は佐野の言葉を聞いて、犬が猫に「フー」と吹きかけられたるのやうに怒り、

作平「何で御座るとい

直ぐ出立せいで可いと。

それは何人に向つ

て云はしやるのぢや、お前さんは私が大切な旦那さまを、私に

遠慮もなく、化物屋敷へ誘導で何をおさせなされた。

襟三は作平が佐野に無禮などを云つては、佐野に氣の毒だと思ひ。

襟三「爺、何でも可いではないか。

と云はれて。作平は眼を丸くして、

作平「何でも可いではないかとは、旦那さま、貴方さまは何をお仰しやりまするので御座りまする。

襟三「マ、可いよ。

作平「イーエ、可くは御座りませんで御座いまする。

そもこの作平——この爺は貴方さまの令閨さまから「爺や頼む

よ」と云つてお預り申したので御座りまする。イヤ令閨さまは

かりでは御座りませぬ、御先祖さまからも「作平乃公が亡くな

つても襟三を乃公と思ふて呉れ」と、お言葉を頂戴致して居り

まする、で御座りますれば、私の言葉は令閨さまは申すまでも

御座りませぬと、御先祖さまのお言葉で御座りまする。

こゝ作平、二代將軍に對する大久保彦左と云ふたやうな風だ。

作平「で御座りまするから、これから直ぐ當地を御出立遊ばされませ。

私が今更申上げませすとも、貴方さまも御記憶で御座りませう、

何日で御座りましたか、布哇と……

襟三は作平が布哇での失敗を云はんとするを見て、

襟三「イヤ了解て居るよ。」

作平「倫敦でも……」

襟三「了解て居るよ。」

作平「その際この作平にお約束下されました……」

襟三「了解て居るよ。」

作平「で御座りまするから、直ぐ御出立下されませ。」

襟三「諾々、承諾した。」

佐野は二人の對話を不得要領に聞いて居つたが、何やら了つたらしいと見て襟三に向ひ、

佐野「私は門外漢のとだから何のとか不得要領で、貴方のお對話が充分に了解ないが、何やら直ぐ當地を出立せられるといふ言葉が

あつたが、何ですか、この爺さんが貴方を迎ひに来て居るところを見ると、何か日本から至急電報でも来たのね？

と襟三は佐野に尋ねられて、まさか布哇と倫敦で失敗した結果、作平の命令を採用すると約束をしたとも、佐野に話すとが出来ないから。

襟三「ウー、フーン、マアそんなものだ。」

と苦しい返答をする。

佐野「それは大變ですね。」

襟三「ナニ大したことはありませんよ。」

とは、ナカク苦しい返答。

* * * * *

初回が布哇、二回が倫敦、三回目が今度の巴里での捕虜、襟三は作

平に強意見をされて、爺、私が悪かつた」と謝罪して「私は今後は決して彼んな魔所へ行かないから、日本へ歸著てから決して女房に話して呉れるな、お前がそんな話を女房に話さうものなら、大騒動が起るからね、可いかい話して呉れるなよ」と、頼んだ、さう云はれて見ると作平「御主人に謝罪せて相済まん」と、心快く承諾をした。

出立下されませ。

襟三は作平に強られて、旅館へ歸ると直ぐ初定を済して、停車場に出で巴里を出立した。

二人は巴里を後に獨逸に向つたが、一言の佛蘭西語が出来ないのみならず、獨逸語は猶更襟三は了解しないのだから、伯林へ着くまでは随分と心細い旅行だ。

襟三「私は獨逸語が出来ないのだから、車内では失敗のないやうに解

肅にして居つて呉れ。

作平「ハイ、私は何日も静肅にして、何事にも注意致して居りまするが、何日も旦那さまがお失敗を遊ばしまするやうな次第で。

襟三「お前から見れば、さう見へるだろうが、何日も私が失敗ののではない、お前が失敗のだ、といふ理由は私一人であつたなれば、

私一人の注意で充分だから、決して失敗を仕出かさないのだが、お前があるから私は私一人でなく、お前の注意までしなければ

ならないやうなことで、平易いへば私は私一人で、二人の注意をしなければならぬとだらう、人間といふものは不完全なもので、同時に二個のものに意志を向けることが出来ないものだ。そ

れは私がいふまでもなく、昔時から學者が明言して居るとだ。

作平「それはさやうで御座りませうとも、思は二つ身は一つ、妾は何としようぞいな、と演劇でも申しましたとが御座りまする、ま

だその上に一人娘にむこ七人と申しまするとが御座ります。

三三「さうだらう、さういつたやうな理由だらう。それなのに私は私とお前の二人分の注意をするのだもの、何所かに手ぬかりが出来やうではないか、その手ぬかりが即ち失敗となるのだ。だから私の失敗は私の失敗のやうに見へるけれど、その實はお前の失敗であるのだ。だが、そこに面白い點がないでもない。といふのはお前は失敗そのものを主観的に見ないで、客観的に見るのだ、だから、失敗が私のであるかの如く見へるのだ、何だ主観と客観と比較して見ると面白いものだから、この議論にはお前も不服はるまいね？」

作平は襟三が主観だの客観だのと、六かしい言葉を云ひ出したので、何が無やら五里霧中を方行して居るやうな感じで、何でも彼でも唯だハイくの一天張。

作平「成程、さやうで御座りまするな、ハイくくく。」

* * * * *

襟三は細心な注意——と云ふよりも、激戦を競々として例の病氣を出さなかつたから、大した失敗を車内に演じないで無事獨逸の伯林に到着した。停車場を出ると何所も同じとで、旅館のものが客引きに出張して居る。襟三はその内で英語を解し得た客引きに言葉をかけ、伯林有名な旅館のプリストルへ行くことになった。

襟三は「これで一安心だ」といふので、馬車の上で作平に向ひ、

作平「爺、こゝが獨逸の首都ベルリンだよ。」

作平「ベルリン」

と云つて作平は一寸首を捻り、

作平「旦那さま、ベルリンと申しますると、私は何だか耳に馴染があ

るやうに思ひました。

機三「はてな。」

機三「一寸不思議だといったやうな體。」

作平「で御座りまするで、熟考て見ましたところ成程馴染があるやうに思ひました等々で御座りまする。」

機三「ベルリンに馴染があるイヤ了解た、お前が馴染があるといふのだから、大凡寸法は了解て居るよ、何日だつたつけお前か和蘭を熟く知つて居ると云つたから、はて不思議などがあるものだ、一時感心したが熟く尋ねて見ると、お前の和蘭は國名の和蘭でなくつて、菓子（ちんげん）の和蘭であつたことがあつた。」

作平「そんなことが御座りました。」

機三「だからお前がベルリンに馴染があるといふのも、それ位の寸法だらうよ。」

と云はれて作平は眞面目になり、

作平「イエ何う致しまして、それはさやうで御座りましたで御座りまするが、ベルリンは決して然様などでは御座りませぬ。熟考すると全く馴染が御座りまする。」

機三「では何う云つたやうな馴染だね？」

作平「その馴染と申しまするは、丁度私が生まれて二三年後のとで御座りました。」

機三「ナカ〜古いとだね。」

作平「へい〜随分と古いとで御座りますが、私は十二三歳の頃實母から承知つたので御座りまする。」

機三「親譲與とはナカ〜振つたものだね、マア何なとただか話して見ることが可い。」

作平「それではお話し申上げまするが私がベルリンを馴染のある名稱

だと申しまするは、古いとで御座りまするが。頃は嘉永六年で御座りましたやうに、肥後で居りまするが、私の故郷で朝霧が晴れますると沖に見たとのない、黒山のやうなものが見へました。それを見て村のものは驚いたの何のちや御座りよせん「サア事だ、サア大變だ」と上よ下よと騒出しましたが、それが異國の黒船で御座りました。それが最初で、交易をするやうになりました。ところが交易を許したと申しまして、伊井掃部頭さまは櫻田の御門外で、水戸浪人のためにスツバリと頭を切られるやら、尊王攘夷の武士が彼方此方に起つてまいりました……

三三「そんなとは少しもベルリンに關係がないぢやないか。」

作平「とお思召ますが、ナカクさやうでは御座りませぬ、その時の異國の黒船に乗つて居りました、異國の大將の姓名をベルリンと申しました。で御座りまするところから考へて見ますると、

その大將の故郷は多分こゝで御座りませう。それでなくばこの當地が、その大將の名を探つたか御座りませう。

三三「爺、お前は感心に巧く間違つたものだな。誤解もそれ位大い一笑ひを通過して泣きたくなるよ。」

これ爺、その時の大將……ではない水師提督はペルリといふ姓で、ベルリンではない、だからこのベルリンとは何等の關係もないのだ。

作平「へー、さやうで御座りまするか、はてな。」

二人が談話をして居る内に、馬車はプリストル旅館へ到着した。

(三十四) 製籠機械

三三主従がプリストル旅館へ到着したのは、午後六時頃であつた、主

従は部屋へ案内されてから服装を改め、食堂へ行き獨逸式の夕飯を喰ひ、それから一寸も外出をしないで、部屋へ入つてそのまゝ寢臺に横臥た、といふのは不案内な土地だから、他出して「迷子」の迷子の襟三やい」になつては大變だといふ例の細心な注意からだ。翌朝ガリリと夜が明けた。襟三は「待つて居つた」と、先登第一に食堂へ飛び込んで朝飯を喫し、作平を連れ、馬車に乗つて日本大使館に向つた。

馬車は大使館へ到着た。襟三は作平を従へて、大使館を訪ふた。大使館の書記官は外交官の卵子だけあつて、流石に馴れたものだ。襟三のみを客室に通した。あはれ作平はお供だといふので立往生と「サア何か御遠慮なくおかけ下さい。」

と襟三は椅子を勧められた。
襟三「ハイ、何も御多忙中伺つて、お邪魔で御座いますね。」

書記「何う仕りました。」

さて貴方が當國へ御來遊なさいましたお目的は？
と問はれて襟三は得意になり、

襟三「大した目的といふほどのとでありませんが、御承知の如く獨逸は新進でありますが、商工業の發達は實に驚くべきものがありますから私は歐米漫遊の途次當國へ立寄つて一月ばかりも當實業界の現況を視察すれば、略その由つて來つた原因を研究し得ませうから、それを参考の一部として、我國實業界の發達に利用しようと思ふて居るのです。イヤモ一目的なぞといふほどのものではありません、アハ、ハ、ハ、

書記官は襟三の談話を聞いて、呆れないでは居られなかつた、といふのは僅々一月ばかりの日子に、獨逸の實業界を視察し了はらうといふのだもの、而してそのやうな大視察を目して一目的といふほど

のものでない」と手軽く否な口軽く、吹き飛ばすのなもの、實際襟三が吹き飛ばしたやうに、巧く何事をも吹き飛ばし得るものだらうか、書記官は憤慨したさを耐へ、

書記成程、御尤な御説です、何か御視察下さいまして、御参考にして下さい、然し貴方が御研究なさいます価値が、當實業界にあるや否や疑問で御座います。

流石は外交官だ巧く嬉しからせを云つたものかな。襟三は書記官の調子に乗せられて、

襟三確に価値はあります、価値はありますが、我國に應用して利益ありや否やは疑問です。實例を引用して云へばですね、私が合衆國に於て、視察した一部分——のその一小部分に製籠機械がありました。

書記「セイロロ」とは何の機械で御座います？

襟三製はツクル、籠はカゴで、籠を製る機械です。

書記成程。

襟三その機械は確に人工を省いて、頗る經濟なものであります。

書記成程。

襟三貴方もさうお思ひでせう、ところがその機械は頗る不經濟な機械で、日本へ輸入しようものなら、必らず損失をするに決定して居ります。

書記成程。

襟三その理由は我國と合衆國と、勞働賃金の相異と、機械の購求金額に對する、利息金の高低、并に籠の需用の多少に仍つて、合衆國で利益があつても、我國に於ては不利益なものになるのです。

書記成程。

三三「それと同一で、當國の實業界を視察しても、それを我國に應用して利益ありや否やは疑問であると云のは、即ち其點なのです。」

書記「成程。」
書記官は「成程」の一天張で、襟三の談話を聞いて居つたが、こんな先生のお相手をして居ては、耐つたものでないから、早く歸らさうと思ひ、

書記「ところで當大使館へ御來防下さいました、貴方の御用向は？」と切り出した。

然し襟三は頗る落附たもので、

三三「ハ！」

と云つて、葉捲烟草をスバク。

書記「御用向は？」

三三「その用件は、通譯者を一人御周旋願ひたいのです。」

書記「御用向は通譯者の周旋ですか。」

三三「さうです。」

書記官はアマリの馬鹿々々しさに、腹を立てるとも出来ない。

書記「さうですか、それなれば當館のものが何人か、通譯を申上げて

も可しいのです……」

三三「それは恐縮ですな。」

書記「……が、御熟知で居つしやいませうが、當館は目下或外交事件のため、頗る多忙を極めて居ります。」

三三「さうでせう、巴里の大使館も矢張或外交事件で、頗る多忙でありました、その多分外交事件といふのは、條約改正の件でありませうて。」

書記官は襟三の言葉を聞いて「ハ、ンさては巴里の大使館も、この人物を巧く謝絶つたのだな」と心附た。

「即今申上げたやうな次第でありますから、遺憾ではありますから、通譯申上げるとが出来兼ねます。」

襟三は何人か通譯をして呉れると、思ふて居つたのに、と落膽してケロリ。何のことはない「こゝまで御座れ、甘酒進上」と云はれて莞爾と喜んで、走つて行つた兒童が、甘酒を貰へなかつたやうな心持。

襟三では通譯者はありませんか。

襟三は心細さうな言葉だ。

書記「さやう通譯者といふものはありません。」

「アア〜〜これでは萬事休矣だ。」と襟三は愈々心細くなつた。

書記然し、日本人俱樂部に東といふ人物がおりますから、そのものに御依頼なさいましたなれば御依頼なされる御誠意の厚薄に仍つて、或は心快く承諾をするでせう。

襟三それは實に好都合です、何も有難う、では失敬して直ぐ俱樂部へ行き誠心誠意その東君を依頼ませう。

襟三は嬉しさに、作平の事を忘れ大使館をいそ〜と出た。

(三十五) バツタ式ではない韓信式

襟三は書記官に「日本人俱樂部へ行け」と御者に命じて貰つて、俱樂部に居る東といふ人物に、一時——一分——否なく一秒時でも早く面會て、是が非でも通譯兼案内の勞を探つて貰はなくは心細く、旅館を離れて大道を獨歩するが出来ないと、遮二無二馬車を急がせた。

襟三書記官の談話に仍ると、東といふ人物は普通の通譯者でないらしい、彼が普通の通譯者だとか、案内者であるなれば四圓の日

給を五圓に増してやると、云へば何の雑作もないのだが、さうではないらしいから、一寸六かしいテ、何にしる誠意の厚薄に仍るといふのだから、少なからず難問題だ。兎に角禮を厚くして頼み込む外はない、ところが依頼するに就いても、東といふ人物の性行を熟知して居るなれば、彼の弱所を襲ふて直ぐ「諾」と云はせることが、出来るに決定して居るが、彼の弱所は勿論のこと長所をさへ、熟知しないのだから、何のとはない敵の強弱を計らずして、遮二無二啗賊をするやうなものだ。さう考へると随分心細い感じがするて、と云つたところで他に名案もないのだから、最初に南洲に大公望を助ふた、文王式に行つて見て、それが巧く行かなかつたら、方法を代へて蠡斯式に出る、然し待てよ、蠡斯式は餘り感心しないね、否や蠡斯式が感心しないのではない、蠡斯といふ名稱が感心しないのだらう、では蠡斯式を

改め韓借式といふ名稱にしよう、アハ、、、
 襟三は不得要とを車上で考へて居る内に、馬車はツンくと奔けて日本人倶楽部の門前に到着た。
 馬車が停止したに襟三は下車しやうとしない。御者は襟三が倶楽部に到着たを心附ないと見て、「倶楽部で御座います」と再三云つたが、襟三は獨逸語を了解しないのだから、少しも心附ないで、切りに首を捻つて居る。御者はそれを見て、牛馬を教へるやうに馬鞭をバチリくと鳴らした、襟三はその音に氣が附て、
 襟三「こゝが倶楽部かね？」
 と云つて御者に尋ねたが、御者は返答をしない。
 襟三「これは僕が失策だ。御者が日本語を了解しないのに、日本語を話したのは飛んだ滑稽だ。洋行者流の十中の八九は、大底斯ういつたやうな洋行をするのだらう、アハ、、、

と夫子それ自から云つて笑つた。その方が幾何滑稽だか知れない。襟三は故意と悠々と馬車を下り、倶楽部の戸内へ入り。

襟三「お頼み申しませう」。

何のとはない、武者修行者が道場を防ふといったやうな風。その聲が奥に通じたか「ハイ」といふ聲が洩れた。

襟三「ヤレ」占たぞ。

一人の日本人は奥から扉を明けて、直立して居る襟三を眺め、

部員「何かお入り下さい。」

「お入り下さい」と云はれなくつても、襟三は一秒も早く入り、

東といふ人物に面會つて、通譯の勞を探るとを、依頼しやうと思つて居るのだから、

部員「ハイ、何も有難う。」

と直に導かれて客室へ通り、

襟三「早速ですが、私は東君にお目にかゝりたいので、伺つたものですが、東君は御在宿でせうか？」

部員「ハイ、居ります。」

襟三では、斯ういふものが面會して、是非一臂の勞を願ひたいと申したと、お傳言を願ひたいですな、而して勝手がましいとですが、可成的早く拜眉を得たいものです。

と云つて、襟三はポケットより名刺入を出し、それより一葉の名刺を取つて、部員に渡した。

部員は襟三の名刺を眺め、

部員「東京〇〇會社重役高井襟三……君——とは貴方ですか？」

部員はナカ／＼落附たもので、悠々と尋問た。襟三はその悠々が頗る有難くなく、

襟三「さうです、さうですから何か早く、東君にその名刺をお渡

し下さい、而して是非面會を願ひたいと……
部長イヤ了解しました。

と云つて愈々落附たものだ。襟三愈々気が燃急て、

襟三何か早く面會が願ひたいのですから、何か早く東君にその名刺
を……

部長東は私です、僕です。

襟三貴方が東君ですか!

部長ハイ、東です。

襟三「オヤ〜! 私は貴方が東君であることを存じませんで、甚だ失敬
致しました。」

東「僕も失敬致しましたが、僕は貴方の御目にかゝつたことが、今日
までないやうに思ひますが——それとも何所かで御目にかゝつ
たことがありますかね?

襟三「拜顔したとはありません。」

東「さうでせうね、それなのに僕に面會たいと云はれますは? 何か
必要な御要件でも……」

襟三「ハイ、必要も必要も頗る必要な用向……ではない、依頼が御座
いまして、

東「はて、御依頼! 一學生の僕に御依頼とは、何ういふとですか
襟三「外のともありませんが、私は名刺の如きもので、歐米漫遊の
ため従僕の作平を連れまして……」

と云つて、フト作平爺を大使館へ遣して置たと思出した。

襟三「サア、大變だ〜。」

と襟三は騒ぐ。東は襟三が狼狽出したを見て、何が何にやら不得要
傾。

東「大變だとは、何かなさつたのですか?

三「ハイ、何か所ではないのです。私の従僕が放つて置き堀になつたのです。」

東「放つて置き堀！ はてな。」

東は首を捻つたが、ナカ／＼以つて要領を得ない。

三「今日まで再三作平は放つて置き堀に、出合たのですから、或は切腹して自殺するかも知れませんが、これは飛んだことになつたな。」

東「切腹するかも知れない——とは、頗る大問題ですね。」

三「ですから何かお救助下さい。」

東「では微力を盡しませう。」

(三十六) 一寸と貴方や

東は、襟三に放つて置き堀にされた作平の事を詳細に尋ねた。尋ねて見ると何のとはない、そんなに狼狽なくても可いのであつたので、馬鹿々々しさと可笑しさに吹き出した。

東「フハ、フハ、それ位のことを狼狽なくても可いではありませんか。御従僕の作平さんとやらが、遣つて居られるところは、日本大使館ですもの、御安心なさつたら可いでせう、それとも鬼神とか悪魔とか居る怪窟に、捕はれたといふのならナカ／＼安心は出来ませんがね。」

成程、東の云つた如く、考へて見ると否な考へて見なくても、安心も安心頗る安心なものであるのだ。

三「如何にも貴説の如くですな、それに何故私は狼狽したのでせう御本人の襟三に了解ないところが、何して局外者の東に了解うぞ。」

東「何も了解ないですな。」

三三 大使館に居るのですから、安心は安心で御座いますが、本人の身になつて見ますると、ナカ／＼呑氣ではありますまいから、早く迎へてやりたいものです。

東一では電話をかけて、馬車で當所まで送り届けて貰ひませう。

三三では恐縮ですが、さう願ひたいものです。

東一の手で大使館へ電話はかけられた、それから三十分間ばかり経過して、作平爺は鞠が鞠がるやうに部屋へコロ／＼と鞠り込んで来て。

襟三の側に行き、

作平 旦那さま、貴方さまは何故私を置き去りになされました、ア—

三三 ツイ急いだものだから、忘却たのだが……

作平 忘却たとは、貴方さま何といふ情ないのを、お仰せなされます。この爺は寝た間も貴方さまのを忘れたとは御座りませぬ



三三「大使館に居るのですから、安心は安心で御座いますが、本人の身になつて見ますると、ナカク吞氣ではありますまいから、早く迎へてやりたいものです。」

東「では電話をかけて、馬車で當所まで送り届けて貰ひませう。」

三三「では恐縮ですが、さう願ひたいものです。」

東の手で大使館へ電話はかけられた、それから三十分間ばかり経過して、作平翁は鞠が轉がるやうに部屋へコロコロと轉り込んで来て、襟三の側に行き、

襟三「且那さま、貴方さまは何故私を置き去りになされました、ア」

.....

三三「ツイ急いだものだから、忘却たのだが.....」

作平「忘却たとは、貴方さま何といふ情ないことを、お仰せなされます

る。この爺は寢た間も貴方さまの事を忘れたとは御座りませぬ



吉原の爺と孫

のに……

三「さうだらう、私が悪かつたのだから、何か怒らないで呉れ、のう爺。」

作「怒りは致しませんが、餘り情ないので……」

三「マア事が無かつたのだから、爺さん機嫌を好くするさ。」

と東は作平を宥めた、作平はそれを何う誤解したのか、眼を丸くして、

作「貴方は何方ぢや、イヤ何人で御座る。私が主従談話を致し居りまするに、局外から無用とを云はしやるな。」

と云つて作平は屹となつた。三はそれを見て、

三「これ爺、お前は何を誤解てそんなとを云ふのだ、この方は我々が御厄介を願ふて居る御方だぞ、そんな失禮なとを云つてはならない。」

威殿に缺けて居る襟三の言葉ではあるが、主人といふ粧飾があるだけに、作平に對しては確に有力である、作平は小犬が飼主に叱られたやうに小さくなり。

作平「ハイ、ツイ熟知致しませんで御座りまして御座りまするで

襟三「東君、從僕が飛んだ失敬をして、申譯がありません。

襟三は作平に代つて謝辭を云つた。東は原と書生だから磊落なものだ。

東「何にそんなとは云はないでも可らしい。見受たところ、その爺

さんはナカ〜正直さうだ。

作平「お仰せの通りツント正直で御座りまする。この爺は未だ泥棒を致しましたとが御座りませぬほど、ハイ正直で御座りまする。

東「泥棒をせぬほど正直だとは、頗る面白い正直だね、證據不充分に付無罪放免されたから、潔白なもので堂々恥づべきでない、

新聞紙上に廣告して洒々として居ると、同一のやうに聞へて、頗る滑稽な正直だね、ツハ、。然し爺さんの會話が拙なため、さう云つたやうに聞こへるだけだから、安心なものさ。

襟三「さうです、彼は頗る會話が拙であります、會話が拙な日本人の通弊です。然し藝妓などは日本人中でも、會話のナカ〜巧みなものですよ。

東「さうですね、さう云へば全くさうですね。襟三「ですから自今日本外交官は、必らず藝妓に接して會話を練習する方が可いでせうて。

東「それも可らしいが、僕は自今外交官たらんとするものは、少なくも新柳の阿嬌に「チョイと貴方や」を浴せて貰つたものたるべしといふ、一條件を資格の内へ加へる方が可いと思ふですな襟三「御名説々々。

作平は二人の談話を、キヨロリカンと聞いて居つたが、燃つたく感
じたと見へ、

作平旦那さま、お談話もお談話で御座りませうが。御見物……では

御座りませぬ御視察は何う遊ばしますか？

作平に注意をされて、襟三は急に心付き、

襟三さうだ、ツイ東君と談話に力が入つて、東君に御依頼申す

とを忘却た。

（三十七） 學位は八々て受けろ

襟三作平、明朝ドレスデンへ出立するのだから、その用意をして置
くがよい、私はこれから手紙を認めるからね。

と云つて襟三は二時間ばかりもかゝつて、手紙を認めて、それを野

低く讀上げる。

拜啓、明朝獨逸の首府伯林を出立可致候に付伯林に於る余の視
察に就いて二三報可致候。

巴里の美は美なりと云へども、それは輕佻浮華なる遊治耶に對
して跨るに足るに過ず候、公園の綠滴たる樹下に於て變愛にあ

こがるゝ男女が逍遙しつゝあるは、菜花に於る春の蝶に候、菜

花が燈油となりし頃は蝶の生命果して如何？

巴里のそれに反し伯林は夏時致々として、働きつゝある蟻の一

族に御座候、蟻には蝶の花やかさ無之候らへども、彼は蝶の如

く秋風一たび吹くも果敢なき死を見不申候、獨逸が現今の隆盛

を見て尙ほ進歩何邊に停止すべきやを知るべからざるは、蟻族

の勤勉に學術を加味したる故に御座候。

現今世界各国に於て、適く學理を種々なる方面に應用し、その

利を示し益を得つゝあるは、蓋し獨逸がその最なるものに候。獨逸以外の諸國に於ては兎ても獨逸の二分の一をだに應用なし居らず候。されば獨逸に於ては御者馬丁すら學理を應用しつゝ有之候。旅館の如きに於てすら、給仕中に博言博士ありて、各國の語を自由に縦り旅客に不便なからしめつゝこれあり候。されば斯の如き歩調にて進歩なしたらんには、遠からず馬車の御者が或容器を車内に具備し、馬が放屁なしたるとき、その瓦斯を容器に入れ置きて、アンモニヤの材料たらしめ可申と推測なし得申候。

實に獨逸は學術應用の本場にして、殆んど學術を獨占致居候。乍然物には必らず表裏これあり候。爾く學術の隆盛なる獨逸に於て、我留學生中の或部分即ち留學生の或ものは、下宿屋の二階に於て、襦袍を着て日夜弄花を暇はせつゝ、二三年の日子を

送り、歸朝前ドクトル、メヂチネといふ學位を購ひ、歸朝後獨逸國ドクトルといふ金看板を掲ぐるもの有之候。由來弄花をなすものはヤ、もすれば、不風流なる警官のため拘引され、冷やかなる鐵窓の下に幸吟の苦を嘗むるものなるに、獨逸に留學せる或留學生は、それに反しドクトル、メヂチネの學位を得申候。これ確に文朋の賜物に有之候。

さてこれより筆を轉じ佛獨二國の婦人觀を肥述致すべく候。一言にて云へば佛國の婦女は待合料亭の娘に、ハイカラの滅金を致せしものにして、獨逸の婦女は質朴なる田舎娘と申すべきものに候。而して前者は俗にいふ「お俠やん」にして、男子を尊敬すべき道を知らず候。後者はそれに反して從順にして男子を尊敬致候。殊に人の妻としてはその夫の命令に服從致候て、夫の命令に反し黄色な壁を立て、夫に首葉を反へす如きと樂に

したくも無之候、而して二者の結果は如何に？ 前者は日々國力を刺ぎつゝあり、後者は世界に雄飛しつゝ有之候、これを以てこれを見れば、優勝劣敗の現世界に雄飛せんとするに要する最大用件は婦女の従順に有之候、と云は男子の勝手千萬なる聲なるやに、誤解する婦女あるなきを保し難く候らへども、これ男子の聲にこれなく神の聲に御座候、終に望んで余は御身の無恙を祈り候

汝に親切なる夫

伯林

襟

三

余に満心の愛を捧げつゝある

我が妻へ

襟三が長い手紙を認めたのを見て、作平も負ぬ氣になり、手紙を認めて、聲高く讀んだ。

以手紙申上奉候、奥さまは御無事の事と存じ候、旦那さまも數ならぬ爺も無事に御座候らへば御安心被下度候、旦那さまはアメリカではチヨットおしやべりなされ續て、イギリスではナカ／＼おしやべりなされ候へども、フランスでは餘り他人に言葉をお仰せ遊ばされず、ドイツでは異人は話し相手にしても面白くないとお仰せ遊ばされ、のう爺随分キヤア／＼と口姦しいが、話相手は奥に限るのうとお仰せられ、あなたさまを戀しさうに見へ申候らへば、近々にお歸りなさるべく候、右お知らせ申上候以上

奥さま

作平

平

三十八 南京蟲の洋行

襟三主従は伯林から汽車に乗つた。彼等の向ふ目的地はドレスデン市である、汽車はドレスデン市の停車場へ到着した。二人は下車してドレスデン市第一流の旅館、グラント、ユニオンの館員の案内を受けて、直ぐ旅館へ行つた。
襟三は列車内で、日本人倶楽部の東が寄贈して呉れた。英文のドレスデン市案内冊を讀んだので、伯林で東に會ふまで、ピク／＼ものであつたのを忘れ、例の通を振り廻はしたくなつて、作平に通を振り廻はす。

襟三爺、こゝはドレスデンといふ、大都會で獨逸で有數な土地だ。
作平「さやうで御座りまするか、へー、さやうに有名地で御座ります

れば、直ぐ御見物——では御座りませぬ、御視察をなされます
るで、御座りませうで御座りませう。

襟三「イヤ直ぐ視察には著手しないよ。
作平「とは何故で御座りまするな。

襟三「モ一、三時過ぎだから、夕方に餘裕もあるまいから、今日は何
所へも出かけないで、これから湯を浴びて、夕飯を食つて十分
間ばかり、旅館内で運動をした上今夜早寝をして、明朝から視
察するにしよう。

作平「へい、それもお可ろしう御座りまするな。成程、何所へま
ありまして、夜間は兎角に魔性のものが、化けて出るもので
御座りますれば、昔時から申します通り、君子危きに近寄らず
で、ハイ、ハイ、御座りまするで御座りまする。

二人は入浴と夕飯を了へて、部屋へ歸つて寢臺に横臥した。ところが

二人とも眠らうと思つても、ナカク眠るとが出来ない、平常から忍耐力の弱い襟三は、眠るとの出来ない苦しさに、

襟三「作平、爺、ア——苦しい。」

と大聲で叫んだ。作平は襟三の叫聲を聞いて、寝衣のまま襟三の部屋へ奔け込んで。

作平「旦那さま、何うなされました？ お氣を確にお持なされませ、

爺はこゝに居りますので御座りまする。

襟三は作平の聲を聞いて、ガバと寢臺から飛び下りて。

襟三「爺、こゝは何といふところだらう？

作平「こゝはドレスデンと申しまして、獨逸で有數な大都會で御座りまする。」

襟三「それは熟知て居るよ、そのとは私がお前に教へてやつたのだ。

作平「では、何と申し上げたら可いので、御座りまする？

襟三「私は何といふところだらうと云つたのは、土地の名を尋ねたのではない。」

作平「では、何で御座りまする？

襟三「私の云つたのは外でもない。」

作平「へい〜。」

襟三「私は寢衣と著かへて、寢臺へ横に臥つた。

作平「私も同様で御座りました。」

襟三「而して早く眠らうとした。

作平「私も明朝早く起きませうと、思つて居りましたで、ハイ同様で御座りました。」

襟三「それでだ。」

作平「それで何で御座りました？

襟三「少し寢臺が温くなつた、そこで私は少々眠さうになつた。」

作平「癩所が温くなつてまゐりますると、何人しも眠くなりまゐります。
三「と思ふと問もなく、私の身體を針で刺すやうに、チク／＼と刺すものがあつて、私はハツと思ふと、身體が痒いやら、チク／＼と痛いやら、何とも云へないほど苦しくなつて來たのだ。」

作平「さうお仰せ遊ばしますると、私も同様で御座りました。」

三「お前のやうな心經の鈍いものでもかい？ 進化の原理に仍ると

文明人は野蠻人よりも、總ての感じが鋭いといふのだから、お

前が感じた位では私が苦しいのは道理だ。」

作平「さやうで御座りまする昨年の夏期で御座りましたつけ、横町の

毒取とか云ふお醫者さんの、養生さんが深夜干してあつた私の

禪を見て「お化物だ」と云つて、氣絶したとが御座りましたが

文明な教育とやらを受けた方は、全く心經が鋭う御座りまする、

そればかりでは御座りませぬ、六かしい理窟に達者なお向ひの
辨護士屋さんの先生は、奥さんが親里へお歸りなされて、お宅
へお歸りなさるのが、少々遅れたとやら云ふて、裁判所に何だ
か六つかしい理窟を云つて、直ぐ新しい奥さんをお迎へな
さいましたとが御座りました。全く文明とやらの方は、心經が
お鋭う居らつしやいまする。」

三「爺、そんなとは何でも可いが、可くないのはチク／＼痛い、

コン／＼痒いのだ。それで私は兎ても眠られないのだが、爺、

この癩癩には蚤が居るのぢやないだらうか？

作平「私も同様で御座りまするが、この心經の鈍い作平が、存じます

るには、それは決して蚤では御座りませぬ。」

三「それでは、何だらう？」

作平「先づ南京蟲といふ野奴で御座りませう。」

三、南京蟲かね。

作平、南京蟲ちやと存じまするが、それに致しましては、南京は支那のもので御座りまするに、西洋に居りまするのが、不思議で御座りまするな。

と云つて。作平は首を捻りしが、

作平、イヤ了解しました、西洋の野奴は支那で養うに、理窟を云ひながら、泥棒を致しまするで、南京蟲が盗んだ衣物に附着て當國へまゐつたのでかな、御座りませうで御座りませう、イヤ因果といふものは怖ろしいもので御座りまする。

三爺、そんなとは何でも可いが、何か眠る工夫がないだらうか？作平、私には一寸六かしう御座りまする。

三、それでは今夜は眠るとが出来ないね、ヤレく。

三は意氣消沈。

たり。

ドレスデン市は歴史的趣味に富る地にして、馬車を縦横に奔れば、澳大利に面する方面は美しき緑山眼に映じて爽快な氣を起さしめ、高莊なる大建築は王宮にして、サクソネの昔時を偲ばしむるに足る歴史的趣味あるは勿論、美術的趣味はよりより多く、觀者をして身天堂にあるかの如く恍惚たらしめ、忘我の域に達せしむるオペラの劇場は、ロココ、美術と研を競ひつゝあり、それに反し旅館の不行届にして非美術的なる余をして終夜眠る能はざらしめたりき。

ドレスデンよりミイセンに至る、ミイセンの最も誇るに足るべきものは王有陶器製造所なり、抑も陶器の製造……以下經濟問題に亙るが故に論文に譲り省略す
獨逸を去つて伊太利に脚を置く、伊太利にはゼノアありツリノあ

(三十九) 首府を見ずにカイロ

翌朝、襟三主従は眠むさうな眼をしながら、ドレンデンを見物して、その夕刻の列車に乗り、ミイセンに行き。それから伊太利を経て、ポートサイドに出で、汽船に乗つて無事日本へ歸朝した。

* * * * *

歸朝後の襟三は以前よりも高襟つて、自分の妻に洋行中の日記の内から、ドレンデン以後を讀んで聞かした。例の作平や下妹をも妻の後に座らしめて、

さてその日記は左の如くある。

余と余のパーレット(従者)を乗せたる列車はドレンデン市に到着し

りミラノあり、ネーブルあり、羅馬あり、ヴェニスあり。ミラノの商工業の發達せる、ネーブルが虎列拉なる語の製産地なる、ヴェニスの水に浮べる、羅馬の歴史的美術的價值ある、余が説明を下すまでもなし。

余はパーレット作平を従へブリンヂン港に出で、汽船に乗じ埃及ポートサイドに出でたり、古代文明を以て誇りにし埃及や如何に！今や英人の一擧一動は埃及を左右なすを得るなり、埃及の首府カイロに一遊なさんと欲せしも、汽船の出帆に時日なきたため止なく一日をポートサイドに送り、翌日日章旗を掲げて歐洲に往復する、我が郵船平野丸に乗りポートサイドを去り、スエス、コロンボ、シンガポール、香港を経て神戸に著せり。

コロンボ以東の各港には我國の人力車あり、西人の所謂「日本娘」あり、それ等は醜は醜なりと雖も、我等大和民族が海外に發展せ

んとする、自然の先驅たるものなれば、我等實業家は彼等に遅れざるやう海外に發展すべき使命を帯ぶ、余が今回の洋行の如き要するにそれをなすの準備の一なりき。

滑稽世界見物終

明治四十四年八月八日印刷
明治四十四年八月十二日發行

滑稽世界見物史附
定價金九拾五錢

著作權
所有

著者	幸野花
發行者	杉本
發行所	東京市神田區小川町壹番地
印刷者	福谷拾太郎
印刷所	東京市麹町區有樂町三丁目一番地
報文社	右

發兌元

東京市神田區
小川町壹番地

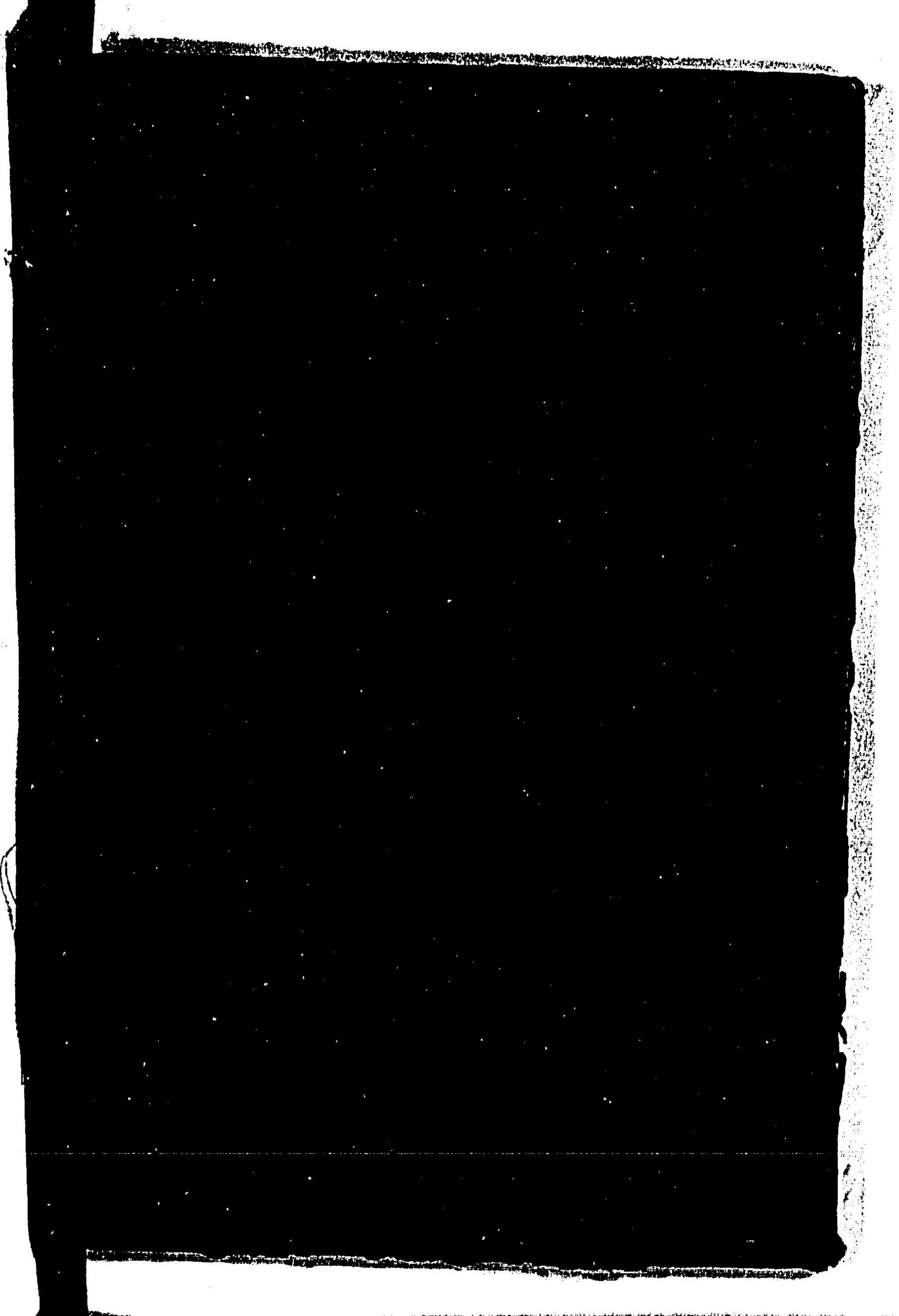
報文館

3

3/12

24

337
138



021936-000-5

332-138

滑稽世界見物

幸野 花咲 / 著

M44

ADA-0172



